

1.....7.....28
幼児の教育

アーカイブズとの対話①

56.....109・110

画像にみる「幼児の生活」(1)

— 子どもの遊び場を戸外に (昭和五年) —

浜口順子

(大学教員)

本誌は、一九〇一年に『婦人と子ども』という誌名で発刊されてから、これまで百十年以上、現場の保育者や保育研究者、家庭の保護者などに読まれてきた。現在、二〇一一年

春号までの全巻全ページが、どこからでもインターネット検索で見ることができている。過去の論考や記事を読むと、その時代の大人たちが抱いていた子どもへの思いが迫り、共感したり、時には疑問をも抱きながら、現代に生きる自らの子ども観が反省される。

今回からシリーズで、過去の『幼児の教育』に掲載された画像に着目し、その時代の雰囲気

気に触れ、それを記事にした編集者との対話をしてみたいと思う。

次の三枚の写真は一九三〇(昭和五)年六月号の口絵に掲載されたものだ。「幼児の生活」という題で、四月号から通算十二枚紹介された写真のうちの三枚で、「遠足」という写真以外には倉橋惣三の文章が添えられている。どれも、幼稚園の子どもたちが戸外で過ごす姿である(当時の五歳児の就園率は5〜6%)。大正時代から徐々に、戸外における保育が奨励されるようになっていた。

浜口順子(はまぐちじゆんこ)
 お茶の水女子大学大学院教授。本誌編集主幹。



枠登り

— 幼児の生活 (十)* —

「上へ上へ。もっともつと上へ」

自ら攀^よじて高きに登ることの愉快は、今日の都会の子どもにも封鎖せられた愉快であります。それを補う為に工夫せられたのが、この新しい遊具「枠登り」(ジングルジム)であります。「あぶない」。それは臆病な大人の余計な懸念に過ぎません。この複雑そうに見える枠の間を攀じさせて、強い握力と、自在な全身筋肉の屈曲とによって軽々と登らせてゆくのは、理智の用心よりも、ずっと賢明な本能の安全があります。

登り切って、青い大空に近づくこと四メートル、爽やかな高い風が、小さい勇士の丸い頭を吹いて居ります。

「上へ上へ。もっともつと上へ」(倉橋惣三)

*紙面の都合により、順序を入れ替えて掲載しています。



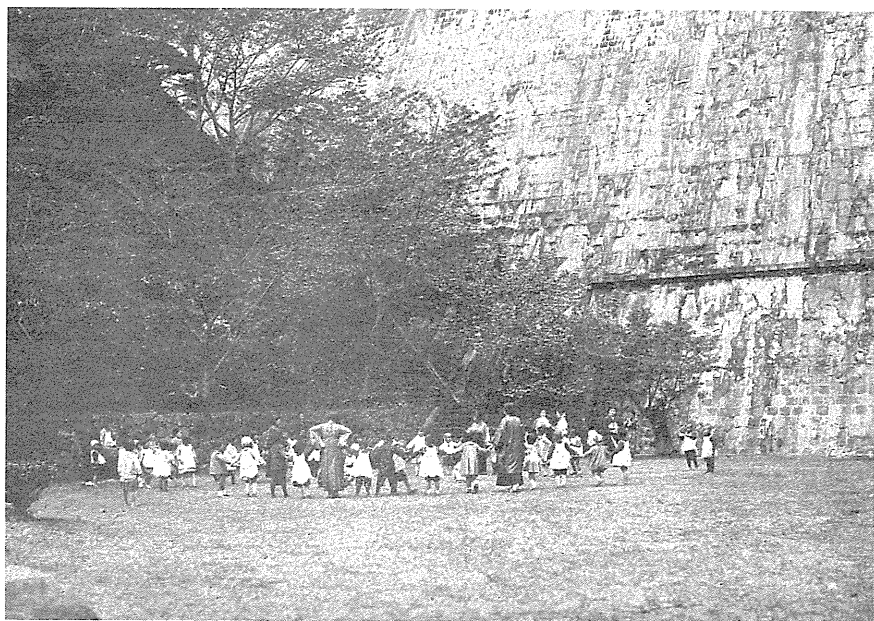
丸 鬼

— 幼児の生活（九）* —

「丸鬼するもの寄つといで」逃げたいのか、鬼になりたいのか、どっちでもいいのであります。溢れ漲る元氣に方向を与え、法則を設けて、その活動満足が一倍深められさえすればいいのであります。幼児達の心の自由は、自ら遊戯の法則の中に入ることによって、聊かも圧さえられないのみか、却って真に自分の自由を満喫することが出来る程に無限に大きいのであります。

（倉橋惣三）

これらの写真と同じ巻に、末田ます（東京市公園課児童遊園掛）による「幼児の遊場」という論考が掲載されている。都市化する社会のはざままで育つ子どもの生育環境への危機感が、医学や心理学などの科学的見地から高まっていたようだ。末田は「光線と戸外の空



▲「遠足」長崎市城山幼稚園

気は彼等の肺臓と心臓を強健にし、自由なる運動は彼等の筋肉を発達せしめ、結核菌其他の伝染病に対する抵抗力を養うのみならず、彼等を快活な精神の所有者たらしむる事が出来ます」と論じている。また「荷車、自転車、自動車の乗入る心配」のないよう「監督者のもとで」遊べる場所が必要であると言い、遊び場という特別な場所の設定が必要な時代になっていたことがわかる。

「粹登り」は「ジャンゲルヂム」「足場やぐら」とも呼ばれ、末田によると、地方にはまだあまり普及しておらず、木製のものもあった。また当時、ジャンゲルヂムに「滑り台を組み合わせたのが流行中」だったそうだ。

「遠足」は大正期から徐々に幼稚園に普及した行事である。近郊鉄道の敷設もその必要条件であった。城跡らしき場所に集う子どもたちの幼稚園は、この十五年後の原爆の爆心地からほど近い場所にあった。